

補論 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区） 庁舎および収蔵庫の建設

1 敷地の選定

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎および収蔵庫を建設するに至った経緯は、第Ⅰ章Bで述べた。ここでは、その用地取得と整備方針の決定、竣工までの経過を報告する。これらについては、既に『飛鳥藤原宮跡発掘調査部新営施設概要』¹や当研究所発行の年報等²で各年度の事業報告としてまとめてきたが、今回はこれらの報告内容に、設計図書などの資料から情報を補ってとりまとめることとする。

建設用地は、藤原宮跡を外れることを基本原則とする一方で、調査部の発掘事業の遂行上、飛鳥地域からも藤原宮域からも離れない候補地のうち、1983年度に橿原市木之本町宮ノ脇に決定した。用地は1984年度から橿原市の財団法人土地開発公社によって先行取得がなされ、1985年度には土地購入を完了した。そして、1985・86年度には本書で報告する発掘調査を実施し、それに並行して建設省近畿地方建設局が地形測量、ボーリング調査等を行った。³

2 土質調査

庁舎の設計と施工を円滑に進めるための土質工学的基礎資料を得ることを目的に、近畿地方建設局が川崎地質株式会社⁴に委託し、敷地調査の一環として、敷地測量調査と併せて1985年9月～11月に行った。調査内容は、調査ボーリングおよび標準貫入試験と、不攪乱試料採取による室内土質試験である。

調査地にあたる香具山は、西南日本内帯の中央構造線のすぐ北側にそって分布する領家花崗岩質変成岩（白亜紀後期）により構成されており、特に調査地周辺では、花崗岩閃緑岩類（黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩）を主体とする。調査ボーリングでは、これらの花崗岩閃緑岩類を基盤層として、その上位を不整合に被覆する段丘砂礫層と地表面を形成する沖積堆積層が認められた。また地下水位は、敷地の西南部を最高位として北東方向へ傾斜し、水位等高線はほぼ等間隔の同心円状に描ける。

地表面付近に分布する沖積堆積層は、そのN値や一軸圧縮強度より推定されるせん断抵抗力や圧密特性から、地耐力はわずかなものしか期待できない。また段丘砂レキ層もN値が低く、良好な支持層とは言えない。よって、上部構造物に対する有効な支持地盤は基盤花崗岩と判断された。地表面が76.7m（OP：78m）前後であるのに対し、基盤花崗岩は、敷地西南部では69.7m（OP：71m）付近で、ほかは概ね71.2～72.2m（OP：72.5～73.5m）付近で出現し、全体に上部ほど風化が進み土砂化している。しかし一方で、実際に敷地全域にわたって行った発掘調査によって、当敷地内の遺構面は74.8～77.4mにあることが判明した。地盤層は遺構面より3～

6m程度低い標高にあるものの、遺構の保存を最優先とする考え方から、杭基礎など遺構面を掘り下げる工法は採らないことを原則として、基礎工法を決定する際には遺構への影響を与えない方法を工夫することとなった。

3 設計と施工

A 建設の経過

1987・88年度の新営に際しては、基本設計と実施設計は近畿地方建設局営繕部、施工管理は建設省京都営繕工事事務所、工事請負は鉄建建設株式会社と村本建設株式会社に委託した。管理研究棟と収蔵庫棟の2棟を中心とする施設を計画し、1987年2月に建物の建築工事が起工、1988年8月には建物が完成し、9月に新庁舎へ移転した。植栽の完了は同年12月で、これをもって竣工をみた (Fig.306)。

その後、1989年6月には公開部門の展示室が「藤原宮跡資料室」として開室した。1990年度には、遺構・遺物の保存処理および保存科学研究のための実験・処理棟が完成し、必要な設備を設置した。さらに出土遺物の増加から第二収蔵庫の新営を計画し、1995年度の補正予算により全体計画の南半分を竣工した。残りの半分は2004年度に事前調査を実施し、2005・06年度に増築した。



Fig. 306 完成した新庁舎（南西上空から）

B 設計の基本方針と構造

1987年度の建物設計に際しては、以下の基本方針を設定した。

- ① 敷地内の遺構の保存に配慮する
 - ・遺構保存に対応する建物配置と構造計画
- ② 周辺環境との調和を図る
 - ・第二種風致地区に相当する自主規制（建蔽率30％以下、最高高さ10m以下など）
 - ・低層分棟型の配置計画
 - ・建物を目立たせず既存樹林と調和する植栽計画
- ③ 古代文化の研究及び公開展示の施設にふさわしい外観と環境とする
 - ・瓦葺の和風の外観
 - ・正面道路沿いの開放的なオープンスペースと遺構を生かした屋外展示
- ④ 効率的で使いやすく快適な建築空間とする
 - ・屋外作業場を取り囲む管理研究棟と収蔵庫棟の建物配置
 - ・コンパクトな平面計画および人とのスムーズな動線計画
 - ・積層棚による効率的な遺物収蔵方式
- ⑤ 省エネルギー化に配慮しメンテナンスの容易さと経済性を重視する
 - ・外壁の断熱化
 - ・空調設備の用途別ゾーニングと蓄熱槽の設置
 - ・節電型照明器具の採用と全館照明の中央点滅装置
- ⑥ 将来の増築を考慮して敷地の有効利用を図る
 - ・建築面積 約1,050㎡の増築スペースを確保

この時、建物は敷地西方の主要遺構を避けて、管理研究棟を東寄りに配置し、敷地東部に南北棟の収蔵庫（第一収蔵庫棟）を建設した。工法は鉄筋コンクリート造で、管理研究棟、第一収蔵庫棟とも2階建である。

当敷地は香具山の麓に位置しており、南から北へやや下がる。また、敷地と香具山との間に中の川が流れているため、敷地内の東半は川へ向かって西から東に下がっている。この地勢は

Tab. 24 建築概要と構造

建物 No.	名 称	竣工年度	面 積		構 造	棟高 (m)	軒高 (m)	屋 根
			建面積 (㎡)	延面積 (㎡)				
1	管理研究棟	1988	3,096	3,998	鉄筋コンクリート造 (一部鉄骨鉄筋コンクリート造) 2階建	10.00	6.25	和風棧瓦葺
2	第一収蔵庫棟	1988	1,303	2,338	鉄筋コンクリート造 2階建	10.00	7.98	和風棧瓦葺
3	第二収蔵庫棟	1995・ 2005	6,016	2,514	鉄筋コンクリート造 3階建	11.75	9.64	和風棧瓦葺
4	実験・処理棟	1990	220	293	鉄筋コンクリート造 2階建	10.00	7.98	和風棧瓦葺
5	付属棟	1988	90	90	鉄筋コンクリート造 (一部鉄骨造) 平屋建	2.30	2.15	フッ素樹脂銅板
6	自転車置場	1988	—	—	鉄骨造 平屋建	3.10	2.30	和風棧瓦葺

遺構検出面においても同様であり、敷地内で標高が高いのが西南部、低いのが東北部、その比高は約2.5mである。このような高低差のある敷地において、遺構を保存しつつ景観に配慮するため、2階建以上の建物は敷地内の東部に配置し、その床レベルを下げることで建物の高さを調整し、第二種風致地区に相当する自主規制として棟高10m以内に抑えた。基礎は、遺構保存を最優先としてベタ基礎地中梁工法とし、基礎本体の施工に際する掘削深度は、遺構検出面＋30cmまでを基本とし、その上に良質土、さらに地盤改良土を厚20cmで敷いて、地盤の強度を高めた。

なお、後に第一収蔵庫北方に保存科学処理施設（実験・処理棟）と、敷地北方に東西棟の収蔵庫（第二収蔵庫棟）を増設したため、建物配置は全体として中庭を囲む口字形の配置となった（Fig. 307）。実験・処理棟は2階建、第二収蔵庫棟は3階建である（Tab. 24）

C 各棟の概要

管理研究棟 管理研究棟は、西から公開部門、管理部門、整理・研究部門となる。

公開部門の展示スペースは、導入部としての玄関ロビー、第一展示室、第二展示室の3つに分かれる。講堂は約200名が収容可能で、主な設備として電動暗幕、電動スクリーン、ウォールバックシステムを設置している。展示室周辺の屋外には、本書報告の発掘調査で判明した藤原京関係の建物遺構の柱位置等を表示している（後述）。

管理部門は棟の北翼部分にあたり、庶務室、応接室、部長室、会議室のほか、現業部門の作業員控室、器材庫、車庫がある。さらに電気室、機械室、空調機械室があり、庶務室に設置した中央監視盤および複合防災盤によって管理している。

整理・研究部門は棟の東翼部分にあたり、ここだけが2階建である。1階が整理部門で遺物により土器、木製品（木簡）、瓦の3つの整理室に分かれる。東端には写真室を付置してある。ほかに特殊遺物保管庫がある。2階は研究室や図書室等で、大部屋を書架で仕切って20人分のスペースを設けた。図書室の蔵書は20,000冊。フィルム保管庫は恒温恒湿としており、各種のフィルム60,000コマを収める。図面資料室には、遺構実測図、大判地図など約18,500点が収納してある。

第一収蔵庫棟 第一収蔵庫の1階には、水漬けの木器や木簡を収納する場所と、袋詰めにした丸・平瓦を積み上げるための「馬房」がある。大型木製品用の水槽は地下式として木製の蓋を被せ、上面も利用できるようにした。2階は収容量を増やすために床を2層敷とし、箱詰めした土器、瓦を高層棚に収めてある。また遺物の上げ下ろしのために、搬入ホールに300kgまで積載可能なダムウェーターを設置し、大型遺物搬入のため、東側に電動シャッターによる開口部を設けた。

第二収蔵庫棟 第二収蔵庫の1階は、整理作業場としても使用も可能な収蔵庫、恒温恒湿の特殊保管庫などがある。2階と3階は全面に高層棚を設置し、箱詰めした遺物を収めている。建物外観、形状、仕上などは、周辺の既存建物との景観調和を基本とした。第一収蔵庫と同様に300kgまで積載可能なダムウェーターを設置し、大型遺物搬入のため、西側に電動シャッターによる開口部を設けた。

実験・処理棟 遺構・遺物の保存処理および保存科学研究のための実験・処理棟は、1階220㎡

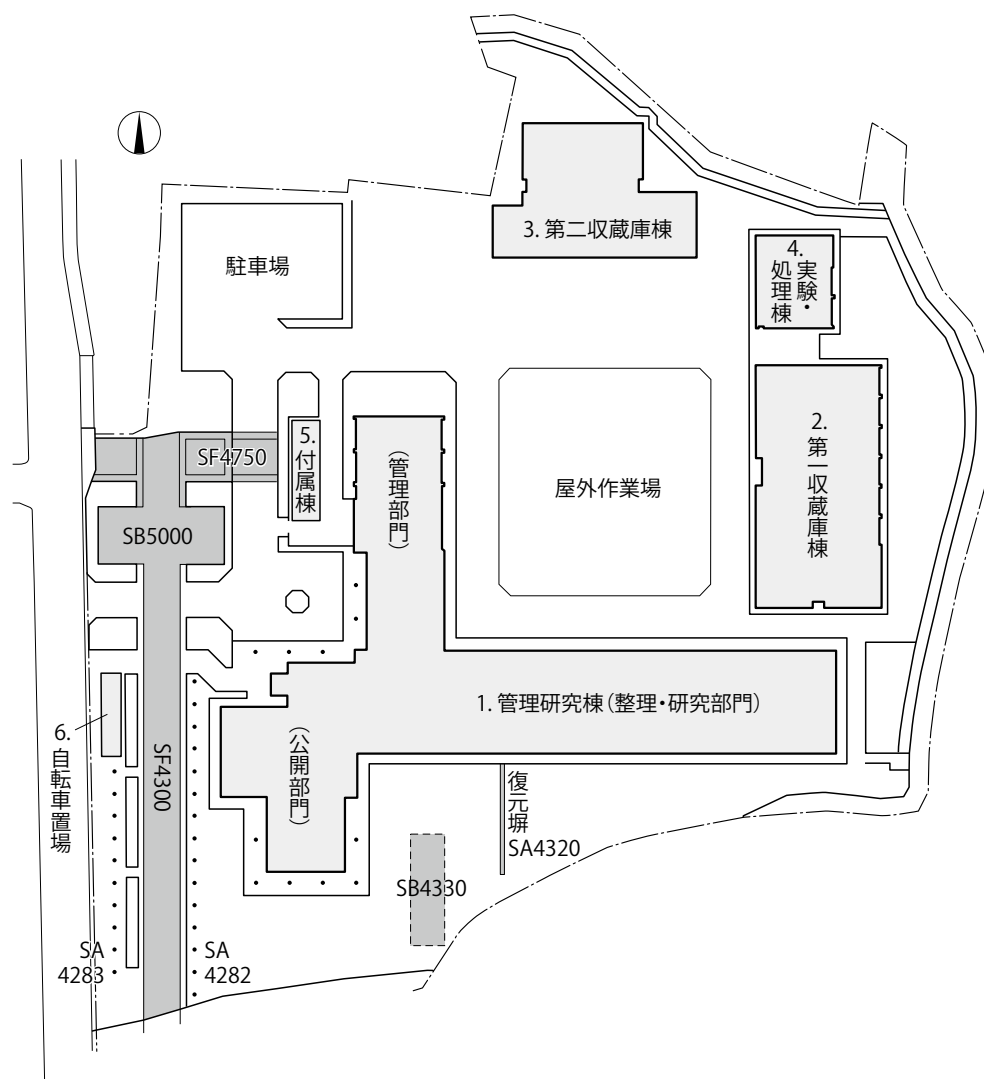


Fig. 307 新庁舎の現在の建物配置

と2階73㎡からなる。1階は保存処理室と処理に関する実験室で、2階は材質調査に関する実験室である。各実験室は、温湿度条件を整えるためパッケージ形ヒートポンプエアコンを単独設置した。また1階保存処理室には、大型遺物を搬入するため、東側に幅4.4m、高さ3.7mの電動シャッターによる開口部を設けた。飛鳥藤原地域で出土の多い有機質遺物、金属製遺物、石造物などの保存処理・研究に対応できるよう、装置や設備の導入を行った。

4 藤原宮跡資料室の展示と屋外遺構表示

藤原宮・京に関する調査研究の成果について一般に公開し、その保存と活用に資することを目的に、庁舎には公開部門を設けている。導入部となる玄関ロビーには藤原宮・京の案内板を設置し、速報展などの企画展示を開催している。ロビーから「タイムトンネル」となる通路を通過すると、展示室に至る。第一展示室は、藤原宮・京について、あるいは発掘調査の進め方について、遺物、パネル、模型、マルチビジョンなどで説明している。第二展示室は「基準資料室」と名付け、さらなる理解を求める一般の方々や研究者を対象に、7世紀代の編年に関わ

る土器と瓦を展示している。

また屋外展示として、発掘調査で判明した敷地内の藤原京期の遺構の位置を表示している。敷地内で条坊道路を検出した一帯は敷地の入口にあたり、藤原京の東三坊坊間路SF4300、六条条間路SF4750と、SF4300の両側に併走する掘立柱南北塀SA4282・4283、および敷地内で最も主要な建物遺構である掘立柱東西棟建物SB5000について、位置と規模を陶柱やタイルで表示した(Ph.171)。また、展示室東南の中庭には、東協殿SB4330の建物範囲を盛土によって表示し、ツゲの木を植栽して柱位置を示すとともに、掘立柱南北塀遺構SA4320の一部を当時の技法によって復元した(Ph.171)。展示室の南西には、屋外展示として、藤原宮西面中門の調査で出土した礎石と唐居敷を設置している。敷地内の最も主要な遺構が、道路際にあたる西部で確認されたため、建物建設に際して主要遺構を避けると同時に、敷地前面での遺構表示による屋外展示が可能となったと言えよう。

-
- 1) 奈文研1989『飛鳥藤原宮跡発掘調査部新宮施設概要』。
 - 2) 『奈文研年報1989』、『同1990』、『同1991』、『同1997-I』。
 - 3) 現国土交通省近畿地方整備局。他にも省庁再編にともなって名称変更された部局があるが、ここでは当時の名称を用いた。
 - 4) 近畿地方建設局営繕部・川崎地質株式会社1985『飛鳥藤原宮跡資料館敷地調査作業 報告書〔土質調査編〕』。